

平成21年5月1日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720083
 研究課題名（和文）：「関東州」から「満洲国」までの中国側文化メディアにかんする通史的研究
 研究課題名（英文） Historical Research on Modern China's Cultural Media from the period of Kantoshu down to the period of Manchuguo.
 研究代表者：
 橋本 雄一（HASHIMOTO, YUICHI）
 千葉大学・言語教育センター・准教授
 研究者番号：30305403

研究成果の概要：

「関東州」期～「満洲国」期という時間と地理空間をつなぐ中国近代文化のあり方について、一端を示し得た。帝国日本の植民地をつなぐ中国側の文化人移動と文化的パースペクティブの推移について、調査・収集した新聞と文学雑誌に基づいて検討し、関連づけることができた。

ただし課題も残った：中国東北における近代文化社会の最初の成熟を大連という都市の視点でのみ捉えるほかなかったことと、扱う文化メディアが限られてしまったことである。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	240,000	3,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：中国文学、植民地文化、中国近代史

1. 研究開始当初の背景

近代東北アジアのキーワードとしての「民族」「言語」は、「植民地主義」の発動あるいは受動によって形成されてきた。研究代表者はこれまで、「満洲国」と呼ばれた地における、中国人による文学活動や記録テキスト（文学作品）の解読を進めてきた。だがその過程で、さらに二つの視野を加えない限り、体系的な把握にならないと感じていた。すなわち、

- ・日露戦争いらいの当該植民地の時間性（「関東州」期からの中国側活動の歴史性）

・近代中国世界とのつながり（中華民国本国あるいは中央界からの人的あるいは精神的な文化交流）である。

2. 研究の目的

本研究は対象の時間幅を、中国中央では五四期に相当する時間幅の「関東州」（大連を中心）という日本租借地から、「満洲国」期までとした。

その間に引ける「民族」と「言語」の線（中国側文化活動）が、日本植民地主義の膨張に

つれて、どうつながり／どう変容させられていったのか、を解明するが目的であった。

このためには、まずその時々中国知識人たち（おもに新聞・雑誌人、作家たち）の活動を詳細に確認していくことが必要である。その実態調査が第一の目的であった。

精神的なつながり（民族＝「中国人」。国民国家＝「中（華民）国」）と物理的なツール（言語＝「中国語」。啓蒙的インフラ＝出版・学校・団体などの各メディア）をもって、その時々中国社会環境と時間性をどのように受けとめかつ利用しながら、彼・彼女らの活動と作品はどのような変遷をたどったのか。

最終的にいかなる地平を目指そうとしたか、そこに共通する何かがあるか。

それらを明らかにすることを、最終的な課題とした。

3. 研究の方法

(1) 代表者自身の研究

これまでの「満洲国」下の中国人作家の作品・テキストをさらに継続調査し、そこに現れた物語パースペクティブと言語特徴を分析した。

加えて、上記作家たち（を育んだ中国東北社会）が「近代中国」（言語、文学、帰属意識など）を獲得するに至る前史＋過程として、いち早く近代中国社会を根付かせようとした大連に注目。中国五四期の影響が色濃い1910年代末からの中国語新聞『泰東日報』の記事データベース化と社説解説を併行して進めた。こちらにはついてはマイクロフィルムリーダーを備えることができ、迅速な閲覧が可能となった。

また、データベース化作業については、一部を研究補助者を雇って行い、入力作業をより効果的に進めた。

(2) 資料の現地調査

受給期間を通じて、中国東北・台湾・韓国に赴き、各大学図書館・研究機関・各地書店において、本研究テーマに関係する資料の存在状況と公開事情を調査した。

入手可能な資料については、コピーや購入といった形で入手に努めた。

(3) 他研究者との交流

受給期間を通じて、中国東北の各研究機関に赴き研究者と意見交換を、台湾では講演と討論会を研究者たちと行った。韓国では国際シンポジウム参加のうちに大学研究者と意見交換と討論を行った。

こうして知りあった台湾の研究者と韓国の研究者とは、その方たちがシンポ参加で来日されたおりに、さらに研究交流を続けている。もって、帝国日本の植民地下における各

地の文化事情の様相と相互の共通点・相違点を代表者は学んでいる。今日に至るまでこの交流関係は続き、関連問題を多様な軸で観察することについて大きな示唆を受けている。

4. 研究成果

(1) 実際の作業と思考の面での成果

上記の年代間（「関東州」期～「満洲国」期）と地域間（大連～おもに「新京」～さらに「帝国日本」）をつなぐ文化人の物理的また精神的な移動のさま（啓蒙知識人の傅立魚、作家の石軍、爵青ら）と、文化パースペクティブの推移（民国アイデンティティー、帝国日本批判、帝国日本による治安維持法の連動影響、近代中国文学言語の成熟、植民地下における文学言語の戦略と即自的営為など）について一端を示し得たと考える。

ただし課題も残った：「関東州」期に相当する中国東北における近代文化社会の成熟を大連という視点でしか捉えなかったことと、扱う文化メディアが限られてしまったことである。その辺りは他の研究者との相互補完的な連携分析が今後必要であると考える。

(2) 他研究者との交流面での成果

上記の研究成果と今後の課題については、後で列挙する発表論文等を執筆する過程において獲得したのはもちろん、韓国・台湾・中国そして日本の研究者との交流も大いに役に立った。これらの交流も本研究の成果として、以下に簡単に列挙しておきたい。これら当地への出張については毎回、資料探査の実施も伴われた。

2009年

春（3月）北京にて、「満洲国」期の作家と北京市社会科学院の研究者と会同、中国における論文等文献集めについてアドヴァイスを得る。さらに植民地文化について意見交流

2008年

秋 韓国 延世大学・韓国民族文学研究所の研究者たちと国際シンポジウムほかの場で討議。「満洲国」下の文学における帝国日本の支配的ディスコースとの関連性を、植民地下の朝鮮の文学のそれと比較

夏 中国 ハルビンにて日本人研究者たちとかつての植民地空間を踏査

同 長春の吉林社会科学院の退職教授、東北師範大学の退職教授、代表者が研究する作家の遺族と、東北における研究現状など関連テーマについて意見交換

夏 東京渋谷にて、代表者が世話人の一人を務める「満洲国」文学研究会において、下記韓国シンポで知りあった民族文学研究所所長を招いて、講演“The Representation of Manchuria in the Korean Literature in Late Colonial Period”（「植民地末期の朝鮮文学

において“満洲”はどう表象されたか?)
を實現、その後、「満洲国」下の「万宝山事
件」をめぐる日本・中国・朝鮮文学のそれぞ
れの表象にかんする共同研究の可能性や、帝
国日本やその植民地における言論統制など
について討議

2007年

秋 中国 長春にて作家の遺族に、作家
の経歴についてヒアリング。とくに中華人民
共和国成立後の経歴について、新事実を得、
その終焉の場所などを踏査。(今後の小説翻
訳本などに活かすことが出来ると考えてい
る。)北京にて北京市社会科学院文学研究所
の植民地文学研究者を訪問、“淪陷区文学”
について意見交換と中国の研究現状をヒア
リング

春 韓国 延世大学・韓国民族文学研究
所の研究者たちと国際シンポジウムほかの
場で討議。文学作品と政治事情を比較する手
法について、その可能性と限界について

春 台湾 国立清華大学台湾文学研究
所にて講演、研究者・大学院生たちと討論。
植民地下を脱出した中国人作家とそこに留
まった作家について、どのような新しい認識
があり得るか、日本の植民地文学研究(とくに
「満洲国」をめぐる)の現状はどのよう
か、など。

2006年

秋 中国 吉林大学文学院の研究者と
交流(日中の関連研究の現状についてなど)、
また同大学院生とともに吉林大学図書館に
て資料探査

5. 主な発表論文等(新しいものから順に)
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文](計4件)

①橋本雄一 王秋蚩と爵青の応答から考
える植民地の「現実」・空間・時間=差(附 翻
訳)

『中国東北文化研究の広場』第2号(「満洲
国」文学研究会)、115-135頁、2009年3月
刊、査読有

②橋本雄一 「辺境」をめぐる植民地=帝国
の言語と文学の言語——「満洲国国境地帯
法」と中国人作家、石軍の小説

『中国東北文化研究の広場』第1号(「満洲
国」文学研究会)、41~49頁、2007年9月
査読有

③橋本雄一 従“故事”地表上流亡の母語—
—石軍等人的話語分析(「物語」の地表から
脱出し漂流する母語——石軍らの作家のデ
ィスクールを分析する)

『抗日戦争時期淪陷区 史料與研究』第1輯
(主編:張泉。中国、江西出版集団・百花洲
文芸出版社)、202~212頁、2007年3月

④橋本雄一 「松花江のほとり」のほうへ—
—音のシンタクスを旅する

『朱夏』第21号「小特集 満洲…放送・演
劇/中国東北…歌」(せらび書房)93~102頁、
2006年8月

[学会発表](計2件)

①橋本雄一 遠い記憶をたどるテキストの
原郷と異郷—爵青「帰郷」の武田泰淳訳と大
内隆雄訳—

国際シンポジウム「第4回 植民地主義と文
学—「満洲国」と文学—」(韓国民族文学研
究所主催)、2008年10月22日、韓国ソウル
延世大学(※フルペーパーを本シンポで会場
配布の論集冊子に収める。67~82頁)

②橋本雄一 「辺境」をめぐる植民地=帝国
の言語と文学の言語——「満洲国国境地帯
法」と中国人作家、石軍の小説

国際シンポジウム「第3回 植民地主義と文
学」(韓国民族文学研究所主催)、2007年5月
25、26日、韓国ソウル 延世大学

[その他](計6件)

①(共同で研究雑誌の刊行。査読委員も)
『中国東北文化研究の広場』第2号(「満洲
国」文学研究会)、2009年3月

②(報告)「満洲国」文学研究会の活動と紀
要論集『中国東北文化研究の広場』

『近現代東北アジア地域史研究会 NEWS
LETTER』第19号、95~100頁、2007年12月

③(翻訳)「南玲北梅」(南の張愛玲、北の梅
娘)について—併せて「オーラル・ヒストリ
ー」にどう対すべきか—

著者:張泉(北京市社会科学院)

『中国東北文化研究の広場』第1号(「満洲
国」文学研究会)、51~58頁、2007年9月

④(共同で研究雑誌の刊行。査読委員も)
『中国東北文化研究の広場』第1号(「満洲
国」文学研究会)、2007年9月

⑤(書評)田中益三著『長く黄色い道——満
洲・女性・戦後』

『社会文学』第25号(日本社会文学会)、147~
150頁、2007年2月

⑥(講演と討論)

「文本中的流亡—在満洲國寫作的中國作家
的母語走向何方」(「跨文化流動與台灣文學」

シリーズ 18) を講演ののち、台湾研究者と討論。台湾、国立清華大学台湾文学研究所にて、
2007 年 3 月 1 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋本 雄一 (HASHIMOTO, YUICHI)
千葉大学・言語教育センター・准教授
研究者番号：30305403

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし